フツーの仕事がしたい

21世紀に甦る、リアル「蟹工船」。

震えるほどの怒りと、それ以上の感動をもらった。映画の中、何度も一緒に怒り、泣き、笑った。
フツーに働き、フツーに生きることが困難となってしまった21世紀。
それを取り戻すための尊厳をかけた闘いの記録に、ものすごく大きな勇気をもらった。

雨宮処凛（作家）

監督・撮影・編集　土屋トカチ　制作：白浜台映像事務所　映像グループ ローポジション　2008年／日本／ＤＶ／70 分／カラー

過労死　格差社会　ワーキングプア　非正規雇用　日雇いハケン
長時間労働　下請け孫請け　ネットカフェ難民　使い捨て

・・・・フツーの仕事がしたい

「フツーの仕事がしたい」・・・状況の差こそあれ、心のなかでそうつぶやいたことのある人は多いだろう。本作は、数値的にみれば明らかに**「フツー」**ではない労働環境に身をおく主人公が、労働組合の力を借りて、**「フツーの仕事」**を獲得する過程を描くドキュメンタリーである。この主人公の労働状況は特別ひどいケースでありながらも、どこを切っても、いまこの社会を生きる自分につながっていると思わせる。彼の口から**「この業界では、フツーだと思っていた。」「(運転は)好きなことだから仕方がない・・。」**というような言葉が飛び出すとき、観る者は彼の問題をぐっと身近に感じるはずである。

もし、あなたが毎日の暮らしに追われ、自分の労働環境について立ち止まり考えたこともなかったとしたら・・・。この映画体験は、おそらく自分がより良い状態で働き生きるための大きなヒントになるかもしれない。

こんなドキュメンタリーは見た事がない。これは、ドキュメンタリーが持つ表現力を確実に示した映画だ。"キャメラは武器である"という事を想った。そして、何故か親鸞の歎異抄を伝承した唯円の心を想った。

堀田泰寛(撮影監督)

ケン・ローチやマイケル・ムーアの諸作同様、これぞ記録映画の迫真ではないか！

中川敬(ミュージシャン/ソウル・フラワー・ユニオン)

この映画は、人を虫けらのように扱う現代ニッポンを生き抜くための「ケンカの作法」を教えてくれる。

本田孝義(映画監督)

被写体への共感から、共闘へと発展したこの映画が、観客と何を共にできるか？醍醐味は、まさにそこにある。

土屋豊(映画監督)

ドキュメンタリーなのでこういう言い方は不謹慎かも知れないが、役者もそろっている。つまり、まず何より映画として面白かった。

迫川尚子(写真家/ベルク副店長)

今の時代、「フツーの仕事がしたい」と誰もが思っているだろう。しかし、どう正せばよいのかわからない。その道筋を、この映画は感動的に、しかも理論的に示している。働く者たちが、過酷な時代を突破するために必見の映画である。

木下武男(昭和女子大学教授)

皆倉信和さん(36歳)は、根っからの車好き。高校卒業後、運送関連の仕事を転々とし、現在はセメント輸送運転手として働いている。しかし月552時間にも及ぶ労働時間ゆえ、家に帰れない日々が続き、心身ともにボロボロな状態。「会社が赤字だから」と賃金も一方的に下がった。生活に限界を感じた皆倉さんは、"誰でも一人でもどんな職業でも加入できる"という文句を頼りにユニオン(労働組合)の扉を叩く。しかし、彼を待っていたのは、会社ぐるみのユニオン脱退工作だった。生き残るための闘いが、否が応でも始まった

フツーの仕事がしたい

土屋トカチ監督作品
2008年／日本／DV／70分／カラー　http://nomalabor.exblog.jp/

1/24(土)▶1/30(金)　12:50/21:00

※1/31(土)以降続映！上映時間は近日決定いたします。

【料金】当日のみ：一般 1,500 円 学生 1,300 円 中・高・シニア 1,000 円

第七藝術劇場
☎06-6302-2073
http://www.nanagei.com/